

# 日本人の



京都、こころここに

vol.51

## 恥を知る心

哲学者

梅原 猛さん



うめはら・たけし 1925年仙台市生まれ。京都大文学部卒。京都市立芸術大学長、国際日本文化研究センター初代所長など歴任。文化勲章受章。著書は『隠された十字架』『水底の歌』『葬られた王朝』など多数。

「忠臣蔵」の芝居は日本人に道徳を教えた

明治以降、特に戦後、日本人は何を忘れたか。この質問に対して、「ここで私は恥を知る心と答えておこう」としよう。アメリカの女性文化人類学者、ルース・ベネディクトは『著書菊と刀』において、日本文化を「恥の文化」として西洋の「罪の文化」に対比させた。ベネディクトは、恥の文化は他律的であり、自律的である罪の文化より道徳的価値において劣ると考えた。



しかし作田啓一氏は名著『恥の文化再考』において、ベネディクトのように日本文化が恥の文化であることは認めるが、恥は決して他律的なものではなく、罪に劣らぬ深い内面性をもつ自律的なものであると論じた。

吉良は、内匠頭は、四十七士は、恥を知っていた

吉良上野介はとうして浅野内匠頭を激しく罵ったのか。それは、勅使の接待を司る最高責任者である彼が田舎大名の不手際によって恥をかきこんだことを恐れたからであろう。そして浅野内匠頭はとうして吉良上野介を松の廊下で斬りつけたのか。それは、田舎大名とはいえず立派な大名である彼が吉良上野介に辱められた、恥をかいたからである。また大石内蔵助率いる浅野内匠頭の家臣たちがとうして艱難辛苦の末に吉良上野介を殺して仇討ちを果たしたのか。それは、彼らが主君の恨みを晴らせない恥知らずの武士と思われぬことに耐えられなかったからである。四十七士こそまさに恥を知る忠臣であったのである。このように武士の社会は、恥を知る心によってその秩序が保たれていたといわねばならない。

金銭欲のために行動し、法にさえ触れなければ潔白だとして恥じるこのない有力政治家がいる。また原子力の安全確保に関する組織の責任者でありながら国家、国民のことを考えず、もっぱら電力会社の意向に従って行動し、しかもまったく責任をとらずに恥じるこのない著名な学者もいる。そしてまた、作品を売ることをすなわち金を稼ぐことばかりに奔走し、自己の芸術観の安易さを反省しない大画家などいた。日本人が恥を忘れることによって、日本は自律的な道徳心を失った国家になったのではなからうか。

この忘れものを取り戻すことは容易ではない。しかしそれを取り戻さないかぎり、日本は「国への道を一挙に進まざるを得ない」と私は思う。



戦後、日本人は物の豊かさで引き換えに大切なものを忘れてきたのではないだろうか。日本人が忘れつつある価値観が今も生き続ける千年の都・京都から温故知新の知恵を発信する。

第一部は今回で終了し、来週から毎日曜日に第2部を掲載します。

# 自律的道德心を取り戻さねば 亡国の道を一挙に進むだろう



武士の社会は恥を知る心で秩序が保たれた(京都市山科区・大石神社)

この恥の文化は武士道と関係があることとは否定できない。武士の道徳を鼓舞するものとして、「忠臣蔵」という芝居がある。「忠臣蔵」は単なる娯楽作品ではなく、多くの日本人に道徳を教えた。その道徳は、表面上は忠義であったが、内面は恥を知

政治家、学者、画家 現代日本人は 恥を失っている

私は、現代の日本社会は恥を失った社会ではないかと思う。国のためとは称するものの、実はもっぱら自己の権力欲や

### 日本の暦

水無月 水無月 水無月

6月も終わりに近づき、いよいよ1年の折り返しを迎えます。「この半年の罪やけがれを落とし、次の半年も元気に」と祈る行事が30日の水無月。夏越祓ともいいます。多くの神社で境内に茅の輪をくぐり、参拝者がこれをくぐって無病息災を願います。現代では梅雨のころの行事ですが、旧暦では立秋(新暦8月7日)をすきてしまう場合もありました。



映画作家 河瀬 直美さん

「風をよみ奈良の小川の夕暮れはみそぎを夏のしるしなりける」。藤原家隆の有名な一首は、上賀茂神社の水無月祓の情景を詠んでいます。旧暦6月、晩夏のころ、禊ぎだけが夏の名残だ」という感慨がこもっています。

■ 交わる場所

「女靴」という映画を創ったとき、このタイトルの言葉の意味を知った。2500年前に言われた言葉だと知ったとき、こんなに昔の人が子孫に遺したかったものの深さを感じた。「女神は死せず。これを女靴」という。日本語に訳すとどういったことになるのだろうか。「女神」とは谷の神。つまり川と川が交わるころの意味もあるらしく、ひとくく古代の人々はこういった場所に神聖なものを置いた。それらは信仰を伴って祈りの場所として人々の心の支えとなる。京都の上賀茂神社もそういえば明神川と御物忌川の交わる場所に鎮座されている。なぜそう交わる場所が神聖なのか。この「女靴」という言葉を使った老子は、説く。交わる場所から命が生まれる。生み出された命は絶えず、その流れは永遠だ。と。「女神」とは女性性を意味し子宮はその命を宿し、この世にかけがえないそれを生み出す。本当に大切な人をここに迎え、歓喜の声を発する女。わたしという一つの命のことが考えられない。今から先へとながってゆくのだということを忘れずにいる場所が京都にある。

安心・安全をひろげたい。マングローブ植林は、地球の未来にかけた保険です。



地球の未来にできること。マングローブ「海の森」づくりは、その答えのひとつです。



JOC GOLD INSURANCE PARTNER

東京海上日動は、1999年度からNGO\*をパートナーに、マングローブの植林をはじめました。それから12年、「海の森」は6,824haを超える面積にひろがりました。CO2を吸収・多く固定化し、地球温暖化の抑制に役立つマングローブ。マングローブ「海の森」づくりは、保険会社である東京海上日動が地球の未来にかけた保険。100年間植林を継続することを目指し、取り組んでまいります。

\*「マングローブ植林行動計画」「財団法人オイスカ」(1999年度～)「国際マングローブ生態系協会」(2009年度～)

東京海上日動 TOKIOMARINE NICHIDO

TOKIOMARINE Quality: 東京海上グループ